



TITLE:

特殊社會學概念の批判 - 一般社會學の概念(二) -

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 特殊社會學概念の批判 - 一般社會學の概念(二) -. 經濟論叢
1928, 27(2): 170-193

ISSUE DATE:

1928-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129662>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷七十二第

行發日一月八年三和昭

論 叢

租稅分類の一案 法學博士 神戶 正雄

特殊社會學概念の批判 文學博士 米田庄太郎

經濟靜態について 文學博士 高田 保馬

說 苑

財政以外の課稅目的 經濟學博士 沙見 三郎

海運市場に就て 經濟學博士 小島昌太郎

經濟法の概念 經濟學士 橋本 文雄

雜 錄

米國の地方自治と財政 經濟學士 中川與之助

土佐藩に於ける武家の借滯作配 法學士 松好 貞夫

貨幣數量說への一考察 經濟學士 松岡 孝兒

百姓一揆發生の季節 經濟學士 黑 正 巖

法 令

治安維持法中改正・重要輸出品取締規則

特殊社會學概念の批判

——一般社會學の概念(二)——

米田庄太郎

(四) 特殊社會學の概念——ジムメルの

形式社會學概念の批判

- (1) 緒言
- (2) ターロドとジムメル
- (3) ジムメルの哲學と社會學
- (4) ジムメルの形式概念に就て
- (5) 「社會學の問題」に於ける形式社會學概念の誕生並に其の批判

本號

- (6) 「社會科學の方法論に就て」に於ける社會科學概念一般の批判
- (7) 「社會學」第一章に於ける形式社會學概念の發達並に其の批判
- (8) 「社會學の基本問題」に於ける形式社會學概念の大成並に其の批判
- (9) ジムメル以後の形式社會學概念の批判

(1) 緒言

私は本論文(一節)の中に述べし如く、社會學は私が純正社會學と云ふ意味か、又は總合社會學と

云ふ意味か、又は組織社會學と云ふ意味が、此等三つの意味の何れかに於て、更に其の最とも完全なる形體に於ては此等三つの意味を總て句括する處の、一般的社會科學である可きものにして、決して他の社會科學と同じ意味にて特殊的社會科學である可きものでも、亦あり得るものでもないと考へるのである。そうして先づ大體上總合社會學の意味にて一般的社會科學としての一般社會學の概念が、如何にコントの社會學概念に於て其の基礎を据へられ、更にミルの社會學概念に於て確立されたかを、本論文(二)節及び(三)節に於て論究したのであるが、併し其の中にも述べし如く、總合社會學の概念が正當に且つ精確に規定される爲めには、純正社會學の概念がコントやミルの社會學概念に於て見るが如くに、總合社會學の概念中に混交されて居る茫漠たる狀態から分化して、明確に樹立されねばならない。純正社會學を混交して居るコントやミルの總合社會學が、眞に總合社會學として純化される爲めには、其の中から純正社會學の部分が除去されねばならないのであるが、併しそれが爲めには先づ純正社會學の概念其物が確立されねばならない。是れ純正社會學の概念が先づ確立されるに非らずば、コントやミルの總合社會學の中から如何なる部分を除去して以て、總合社會學の概念を純化す可きかは、明かに見定め得られないからである。

私の見る處によれば、コントやミルやスペンサーなどの社會學が、今日の獨逸の社會學者が非

難するが如き所謂百科全書的狀態を呈し、又歴史哲學と混同されて居るのは、ツマリ彼等は純正社會學と總合社會學とを明かに區別し、そうして先づ純正社會學を建設し、然る後に之れに基いて總合社會學を建設す可きものなることを、能く理解しなかつたが爲めであると思はれる。純正社會學によりて與へられる基礎及び方針に基いて建設されるに非らずば、總合社會學は自から百科全書的となり、又歴史哲學的とならざるを得ないのである。されば歴史的に見て、コントやミルやスベンサー等の社會學概念から、社會學概念が眞の發達をなす爲めには、純正社會學の概念の確立されることが、甚だ肝要であることは明かに覺識される。そうして此の肝要なる仕事に先づ着手したのは、私の舊師タールドとジムメルとである。但しさきにも少しく述べし如く、波蘭の貴族で、佛蘭西の學界で名を擧げたヅ・ロベルタイーは、タールドやジムメルに先だち、千八百七十年代から千八百八十年代に亘りて公にせる諸論文に、既に純正社會學と總合社會學とを區別する爲めに重要な或理由を明白に論述して居たが、併し彼はコントの實證主義を超出したと稱して居るに拘らず、少なくとも社會學の概念に於ては尙ほあまりにコントに囚はれて居たが爲めに、實際上此の區別を立てるに至らなかつた。

(2) タールドとジムメル

純正社會學概念の創設者としてタールドとジムメルとは、現代社會學の發達上甚だ重要な地

位を占めて居る。但しタールドはジムメルに先立ちて純正社會學或は形式社會學を創説し、且つ私の立場から見れば、又最近の獨逸社會學の傾向から見ても、ジムメルよりは一層正當に純正社會學或は形式社會學を論述して居ると思はれるが、然るに獨逸語を以て學界の魔術語であるが如くに迷信し、又獨逸の學者の云ふことは何んでも無批判的に盲信する人々の少なからざる我國の社會學界にありては、獨りジムメルのみが喧傳され、タールドには全く注意されて居ない。是れは我國に於ける社會學の健實なる發達の爲めには、決して喜ぶ可き傾向でない。我が日本の社會學は歐米何れの國の社會學にも隸屬す可きものでない。我々日本の社會學者はあらゆる歐米諸國の社會學の上に立ち、獨得の立場から之を批判的に包括して、獨立な社會學を建設す可きである。かくて我々は獨逸の社會學に盲従す可きでなく、之を批判的に評價す可きである。更に獨逸以外の諸國の社會學をも正當に理解し評價す可きである。歐米何れの國の社會學も、崇拜す可き神を我々に與へるのではなく、新たに建設さる可き日本の社會學の材料を提供するものと見做す可きである。されば私は此處にジムメルの社會學概念を批判的に評價せんとするに當つて、先づタールドの社會學概念を批判的に評價するのは、正當な順序であると思ふ。併し此の(四)節に於て私の論究せんとする主題は、つまり社會學を他の社會科學と同様な特殊的社會科學であるとする見解の謬妄である。そうしてジムメルは彼の形式社會學を、他の社會科學と同様な特殊的社會科學

である。見たが、タールドはそうでない。タールドは實質的にジムメルの形式社會學と同様な純正社會學の概念を、ジムメルに先立ちて且つ一層正當に創説したが、併し彼は之を以て一般的社會科學と見たのである。かくて此の(四節)の主題から見ればタールドの純正社會學概念は問題とならない。それで此處ではタールドの社會學概念に就てはほんの一言するだけに止め、又タールドとジムメルとの根本的類似或は一致に付て、私の識得したことを少しく述べて置く。

さきに述べし如くに、社會學概念の發達を歴史的に考察するに當つては、コント、ミル、スペンサー等の社會學概念に次で、純正社會學或は形式社會學の概念の確立されることは甚だ肝要であつたが、今何人にも先だちて先づ之を企だてたのはタールドである。彼は千八百八十年代に社會學の研究が勃興し來れる際、當時の一般的傾向、即ち社會の進化を主題とする總合社會學的傾向に反抗して、純社會的なるもの、一切の社會現象の根本的元素的なるものを、心と心との相互作用によりて理解することを主題とする純正社會學を提唱したのである。併し彼は新方針の創設者に於て屢々見るが如く、彼の創設する純正社會學の意義をあまりに重要視したが爲めに、純正社會學を以て社會學の全體と認め、そうして之を基礎として諸般の特殊的社會現象を具體的に研究する特殊的社會科學の存立を承認したが、總合社會學の概念を構成しなかつた。かくてタールドは社會學概念其物に於てはコントと全く異なつて居るが、併し社會學と他の社會科學との關係

に付ては、コントと大體上同様な見解を立てゝ居たのである。

私が最も早く心から牽引されたのはタールドの社會學であつた。(但し是れは單に學問上の理由によるばかりでなく、私が米國で社會學の研究を始めた頃の私の境遇や精神狀態に基因する處も少なくなかつたのである。)併し私は始めからタールドに盲從したのではなかつた。かくて心と心との相互作用の概念に於ても、亦之を展開して純正社會學を建設する方針に於ても、タールドとは異なつて居る。そうして其の後私は益々私の方針に於て進んだが爲めに、私の純正社會學はタールドのとは、大に異なるものとなつた。是れ私は根本的にはタールドの純正社會學の概念を承認しながら、其の現實なる展開に於てはタールドの説に多くの不滿な點を發見したからである。殊に私はタールドの社會學には總合社會學の缺けて居ることを不滿に感じた。そうしてコントやミルなどの總合社會學の概念が、純正社會學の概念によりて純化されることが必要であると同様に、タールドの純正社會學の概念は總合社會學の概念によりて純化されることが必要であると同様である。此の點に付ては私は今日のフィアカントの社會學に對しても同様な考へを抱いて居る。フィアカントの純正社會學或は形式社會學も、總合社會學の概念によりて純化される必要がある。

タールドの社會學概念の批判は、此處では右に述べしぐらひに止め、次にタールドとジムメル

この根本的類似或は一致に付て少しく述べて置きたい、惟ふにタールドの社會學から出發した私
が、始めてジムメルの著作に接した際大なる牽引を感じたのは、當時私は判然意識して居なかつ
たが、兩者の間に存する根本的類似或は一致に基因したのであらう。併し此處では此の類似或は
一致に付て詳しく述べる暇はないから、只其の主要なるものを列擧するだけに止める。

(a) タールドはジムメルと同じく、フリーシャイセン・ケーラーがジムメルを評論する際に用ひ
た意味で、「哲學的個人主義」を根本的に抱持して居たこと、

(b) タールドの思想の根柢には常に、生々活動する極微の無限に豊富な可能の世界のイデーが存
立して居るが、ジムメルの思想の根柢にもヤハリ常に、無限に豊富な躍動する生命のイデー
が存立して居ること、

(c) 兩者共に思想の體系を立てることに無關心にして、何れの問題に就ても根本的には天才的
自發的に直觀し思惟する傾向大なること、

(b) 兩者共に豊富な潤澤な藝術的稟性に恵まれ、宇宙人性を結局藝術的に觀想する傾向あるこ
と、(此の點に於てはタールドは殊に著しいので、彼はカントやヘーゲルの哲學體系をも結
局藝術的に觀賞せんとした、又彼の社會觀は結局藝術的社會觀である、Fragment d'histoire

future、田邊壽利氏譯「未來史の斷片」參考)

(e) 兩者共に社會的なものゝ中に殊に純社會的なものを求めて、之を社會學特有の對象となさんとし、更に兩者共に心と心との相互作用によりて之を理解せんとしたこと。

(f) 兩者共に社會現象に精密微妙な心理學的分析を施し、そうして固定し結晶せる社會關係を、結局流動的な微妙な社會關係即ち心と心との相互作用に溶解して説明せんとしたこと。

(g) タールドの思想感情は深奥精妙豊富にして、最も洗練されたる文化語佛蘭語を以ても、之を其のまゝに表出するには尙ほ不充分にして、巧妙なる類比的敘述法が多く用ひられ、それが爲めに彼の文體には晦澁な點があると云はれて居るが、ジムメルの文體に就ては、マックス・アブラーは左の如く述べて居る。

Die Schwierigkeit des Stils des Simmelschen Schriften——eine Schwierigkeit, die eigentlich nur die andere Seite einer unerhörten Ausdrucksfähigkeit ist, einer bisher kaum dagewesenen Sprachbeherrschung und Virtuosität, welche die Fülle der sich drängenden Inhalte des Denkens und die Unfassbarkeiten des Fühlens, ja blosser Stimmungen, in klar umrissene Begriffe zu fassen weiss. (Max Adler, Georg Simmels Bedeutung für die Geistesgeschichte, 1919).

尙ほ其の及ばせる影響の廣く且つ深きに拘らず、學派を作らなかつたことや、又大學の教授となつたのは甚だ晩年であつたことなども相似て居る。其外にも詳しく吟味すれば幾多の類似が發

見される。併し兩者の間に又重大なる差異も存在するので、吾人は兩者を比較する爲めには、類似或は一致と共に差異にも注目せねばならぬ。そうして是れは現代社會學の發達の研究上、甚だ興味ある又重要な一問題であるが、此處では之れに論及することは出来ない。是れより直ぐにジムメルの特殊社會學概念の批判に移ることとする。

(3) ジムメルの哲學と社會學

我國のジムメル社會學研究者の羅針盤となつて居ると思はれるマリヤ・シュタインホッフの「ゲオルヒ・ジムメルに於ける社會學的基本範疇としての形式」(千九百二十五年)の最後の節の始めに、左の如き言葉が見出される。「ジムメルは哲學者であつた。彼の社會學的諸研究も亦、彼に特質的な哲學的思惟型の見解に従へば、世界に對する彼の個人的態度の表現にして、只全體的世界形象に對する彼の精神の根本的態度からのみ、理解され得るのである。ジムメルの社會學の見解は彼の哲學に根柢を有するので、かくて思想家としての彼の、それ自身に於て完結せる生涯事業から切り離し得られるものでない。若し敢てそうするならば、彼の社會學の見解が依て以て立つ處の土臺は崩壊する。」是れ實に私が二十數年前からとつて居た見解であるので、かくて私は京都帝國大學文學部に於て特殊講義として二度「ジムメルの社會學」を講述せる時も、ジムメルの哲學全體を説き、其の一方面として彼の社會學を説いたのである。

ジムメルは社會學の專攻者でも、亦何れの學問の專攻者でもなかつた。彼の知的興味、知的同情、知的活動はあまりに廣大にして、それが爲めに彼は何れかの學問に全力を集中する専門學者となることは出来なかつた。タールドも同様であつたが、併し彼は少なくとも犯罪學に於ては、伊太利學派に對抗して起れる佛蘭西學派の創設者として、一の専門學者であつたとも云ひ得られる。さはれジムメルはタールドだけの意味でも、専門學者ではなかつたのである。されば吾人はジムメルの社會學を、彼の思惟活動の一方面として、其の全體に結び附けて考察せねばならない。併しかゝる見地からジムメルの社會學概念だけでも詳しく論究することは、雜誌論文の遂成し得る仕事ではない。且つ私は目下ジムメルの哲學を發達史的に、更に現代の獨佛英の哲學との關係に於て究明し、そうしてそれに結び附けて彼の社會學をヤハリ發達史的に、更に現代の社會學との關係に於て究明せんとする著作に着手して居るから、詳しくは同著作に於て述べることにし、此處では只彼の社會學概念は決して彼自身の考へる如く、又幾多の今日の社會學者の推賞する如く、一の特殊社會學概念ではなく、實質的には一の一般社會學概念であること、或は彼は一般社會學概念を排斥して居るが、併しそれは一般社會學を純化されない傳來の總合社會學の意味に解しての事であつて、私の云ふが如き純正社會學を意味するものとしては、彼の社會學概念は一の一般社會學概念であることを論證するだけに止める。

さてジムメルの社會學概念は二つの根本思想から成立して居ると見做し得られる。其の一は社會或は社會的歴史的現實態の形式と内容とを區別し、此の區別に基いて、社會の諸内容を夫れ夫れ對象とするものと認められる既存の社會諸科學の外に、社會の一切の形式を對象とする新しき社會科學の存立の可能性及び必要性を認め、かゝる新しき社會科學を社會學と稱すること、其の二はかゝる社會學は他の社會諸科學が社會の一方面即ち内容の諸方面を抽象して夫れ夫れ對象とする特殊的社會科學であると同じく、ヤハリ社會の一方面即ち形式の方面を抽象して對象とするものであるが故に、他の社會諸科學と同様に一の特殊的社會科學にして、決して一般的社會科學ではないと見ることである。

今右の二つの根本思想に付て、私は先づ第一の根本思想は大體上正當であると考へる。社會の形式とはつまり心と心との相互作用から成立する心と心との一般的相互關係即ち形式であると見るに於ては、夫れは確かに社會の諸内容から切り離して科學的研究の對象となし得られるもの、否かなざる可きものである。私の純正社會學と云ふは、ジムメルの言葉で云ひ表はせば、社會の形式或は社會化の形式を研究するものに外ならないのである。かくて私はジムメルはタールドに次で純正社會學の概念を定立した人であるを見て、現代社會學の發達に對する彼の功績を充分に承認する。其の詳しき展開に於ては、私の純正社會學はタールドの純正社會學と異なつて居ると

同じく、ジムメルの形式社會學とも亦大に異なつて居る。併し根本思想に於ては大體上一致して居る。否な私は根本的にはタールド及びジムメルの説に従ふて、私の純正社會學の概念を立てたのである。併し私はさきに述し如く、タールドが純正社會學を社會學の全體と見るに反對すると同じく、ジムメルが形式社會學を以て社會學の全體と見るのにもヤハリ反對する。私の見る處によれば、さきに述べし如くに、社會學は少なくとも純正社會學と總合社會學との二部門から成立す可きものである。

ジムメルの社會學概念の第一の根本思想に付ては、私は右に述べしが如き意味にて大體上之を承認するのであるが、併し第二の根本思想即ち社會學を他の社會科學と同じく一の特殊の社會科學と見る思想は、全然正當でないと考へる。そうして此の事を論證せんとするのが、即ち本節の目的であり、且つ本論文全體の主眼點であるのである。それで私は先づ、ジムメルが形式社會學の概念を始めて明白に論述せる論文「社會學の問題」(Das Problem der Sociologie, 1894.)に就て考察し、それより彼が特に社會學の方法論を論述せる「社會科學の方法論に就て」(Zur Methodik der Socialwissenschaft, 1896.)「社會學」第一章 (Sociologie, 1908. I. Das Problem der Soziologie)、「社會學の基本問題」(Grundfragen der Soziologie, 1917.)等に就て順次に考察したいと思ふ。

(4) ジュメルの形式概念に就て

尙は右の問題を論ずるに先だち、此處に注目して置かねばならぬ一問題がある。それはジュメルの形式概念一般に就てである。ジュメルは社會に就て始めて、又社會に就てだけ、形式と内容とを區別して考へたのではなく、形式と内容との區別は彼の思想生活全體を通じて、彼の思惟の根本範疇となつて居るものである。私の今日までに調らべた處では、彼が始めて明白に形式と内容との區別を立て、考察して居るのは、彼の最初の大冊の著書「倫理學序説」(Einführung in die Morawissenschaft, 1892-3.) に於てである。但し本書に先だち彼は「歴史哲學の諸問題」(Die Probleme der Geschichtsphilosophie, 1892.) 第一版を公にして居るが、私は同版を全然改正したと云ふ第二版を所蔵して居るだけで、第一版はまだ手に入れることが出来ないから、何とも云ふことが出来ないが、第二版から推察すれば第一版の中に既に形式と内容との區別が立てられて居るかも知れない。とにかくジュメルが此の區別を明白に樹立して思惟し始めたのは、千八百九十年後からであると思はれる。と云ふのは千八百九十年に公にされた彼の著作「社會的分化に就て」(Über Soziale Differenzierung) に於ては、此の區別はまだ明白には立てられて居ないと思はれるからである。本書に於てはジュメルは、根本的な倫理的概念に就て形式と内容とを區別して考察し、其の心理的、社會的及び歴史的内容を科學的に研究して、以て科學的倫理學を建設するの必要を論證せんとして居る。そうしてそれより以後の彼の著作にありては、何れの問題の研究に於ても、一般に此の形式と内容との區別が明白に又は陰に其の根柢に据へられて居ると思はれる。併し其等の總ての場合を比較して考察すると、彼の形式及び内容の概念の意義は一定して居ないで種々變化して居ると思はれる。或場合には形式及び内容の概念は方法論的なものとして、他の場合には

認識論的なるものとして、更に他の場合には形而上學的なるもの、如くに、取扱はれて居ると思はれる。さればジムメルの形式及び内容の諸意義を分類して詳しく研究することは、彼の思想を其の全體に亘りて深く了解する爲めには、甚だ肝要なる一條件であると考へられる。殊に彼の社會學の研究に於ては、私は彼の形式と内容との認識論的意義を詳しく究明することは肝要であると思ふ。「社會學」第一章によりて見れば、ジムメルは社會學上の形式概念を純認識論的形式概念から區別して居る。そうして彼が其處で特に「社會の認識論」(die Erkenntnistheorie der Gesellschaft)と稱するものに於ける形式概念は、彼が社會學の成立の基礎と見る方法論的形式概念と異なるものである。併し總て方法論的概念は認識論的論理學的基礎の上に構成され、認識論的論理學的に基礎附けられたるものに非らずば、學問論的實効を有しないものである。さればジムメルの社會學上の方法論的形式概念も、認識論的論理學的に基礎附けられて居るものに非らずば、方法論的實効を有しない。かくて其の認識論的論理學的意義を究明することは、實にジムメルの社會學概念の死活問題である可きである。然るに今日までジムメルの社會學を研究した人々で、其の點に注目したものはまだない様である。さきに我國のジムメル社會學研究者の羅針盤となつて居る様である云へるマリア・シュタインホッフの論文「ゲオルヒ・ジムメルに於ける社會學的基本範疇としての形式」は、社會學に於けるジムメルの形式概念をかなり詳しく究明して居る

が、併し其の認識論的論理學的意義には全く注目して居ない。(Maria Steinhoff, Die Form als soziologische Grundkategorie bei Georg Simmel.) 又マムラーは「シヨルシュ・シムメルに於ける哲學的相對主義」に於て、特に形式と内容との區別に注目して、シムメルの哲學を發達史的に研究して居るが、併し彼の形式概念の諸意義を區別して居ない、殊に其の一般的認識論的論理學的意義に就ては、別に論究して居ない。(A. Mamelet, Le relativisme philosophique chez Georg Simmel, 1914.) 又マックス・アドラーの「精神史に對するゲオルヒ・シムメルの意義」(Max Adler, Georg Simmels Bedeutung für Geistesgeschichte, 1919) フリシャイゼン・ケーラーの「ゲオルヒ・シムメル」(Max Frischeisen-Köhler, Georg Simmel, 1920.) クラカウエルの「ゲオルヒ・シムメル」(Siegfried Kracauer, Georg Simmel, 1920.) ツァンハンの「ゲオルヒ・シムメルの生命哲學の批判」(Wilhelm Fabian, Kritik der Lebensphilosophie Georg Simmels, 1926) 等に於ても、シムメルの形式概念の諸意義が組織的に論述されて居ない、殊に其の一般的認識論的論理學的意義の究明は行はれて居ない。それで私は特に此の問題に注意して居るのであるが、併し此處に之を論述する暇はなく、且つ必要はない。と云ふのは本論文の主旨とする處の、社會學は一般的社會科學であることを論證する爲めに、シムメルが特殊的一社會科學と見る彼の形式社會學なるものも、ツマリは一種の一般社會學に外ならぬことを究明するには、別に彼の形式概念の認識論的論

理學的意義を詳しく研究しなくともよいからである。それで此處ではジムメルの形式社會學の眞義を本論文の目的以上に、深く詳しく究明する爲めには、彼の形式概念を詳しく研究し、殊に其の一般的な認識論的論理學的意義を研究することの必要なるを、以上述べし如くに指示するだけに止めて、其の詳論は私の今着手して居る著作に譲り、そうして是れより彼の社會學に於ける方法論的形式概念に就て、社會の形式なるものは社會の夫れ夫れの特殊的諸内容とは異なつて一般の性質のものであり、隨ふて之を對象とする社會學は一の一般的社會科學即ち一般社會學である可く、決して他の社會諸科學と同様に特殊的社會科學であり得ないことを論證することとする。

(5)「社會學の問題」に於ける形式社會學概念の誕生並に其の批判

さきに述べし如く、ジムメルが形式社會學の概念を始めて明白に論述したのは、千八百九十四年「シユモラー年報」に公せる「社會學の問題」に於てである。

此の論文は同年佛國の哲學雜誌 *Revue de Métaphysique et de Morale* に於て佛譯され、文翌年「米國政治學及び社會學院年報」の中に英譯された事によりて、當時如何に學界の注意を惹いたかは推察される。尙ほ此の論文は京極帝國大學文學部講師五十嵐文學士のジムメルの「社會的分化に就て」の邦譯「社會的文化論」の中に附録として邦譯されて居る。 今此の論文によりて見るに、ジムメルは社會學が他の總ての社會科學から區別される一の

社會科學として如何にして構成され得るかは、先づ心理學が一の科學として構成されて居る理由に比して理解されると論じて居る。其の論ずる處によれば、只意識の内容のみが認識の對象となり得るものであるから、認識の對象は只之を産出する心理的諸力によりて、更に心理的諸法則に

從ふてのみ理解され得るのであると云ふ理由に基いて、一切の科學を心理學に於て融合せんとせる人々がある。是れにも一理はあるが、併しそれに拘らず一般に心理學はあるがまゝの心意の諸機能の科學として、個別的事物即ち認識する表象作用の個別的諸内容を探求する諸科學から、正當に分離されて居る。心理學にありては諸機能、諸力、諸規範、其他如何に命名されて居るにせよ、とにかく心意に於ける具體的事象に對して、法則、定型、一般的なものが特異的或は單稱的なるものに對し、或は形式が形成されたるものに對すると同じ關係を有するものが、包括的に或は一定の範域に限りて抽象されて居るのである。一切の事象は心意に於ける一の事象であると見做し得らると同じく、他方面から見れば社會に於ける一の事象であると見做し得られる。併し一切のものは確かに只意識が存立すると云ふ條件の下に於てのみ與へられて居るとしても、それが爲めに一切のものはもともとから心理學の範圍に屬すると云ひ得られないと同様に、一切のものは確かに只社會の中に、又社會が與へられて居ると云ふ條件の下に於てのみ生起するとしても、それが爲めに一切のものはもともとから社會學に内屬するものであると見るは、粗雑な混亂させる見方である。之れに反して、客觀的質料から特に心理的なるものを分化させることが、科學としての心理學を産出する如く、嚴密に云ふ本來の社會學は只特に社會的なるもの、即ち社會化の中に又社會化によりて實現される個別的諸關心及び諸内容から區別して、あるがまゝの社會化の一般的

形式及び個別的諸形式を取扱ふことによりて成立し得るものと、考へらる可きである。そうして其等の諸關心及び諸内容は特殊的(物件的又は歴史的)諸科學 (die speciellen Wissenschaften)の内容を形成するのであるが、今社會學は其等の特殊的諸科學或は其等の諸關心及び諸内容の諸圈を貫いて、あるがまゝの本來の社會的諸力及び諸元素即ち社會化諸形式を、其等の諸圈に於て見定め包括する一の新しき圈を設定するのである。

ジムメルは社會學を一の獨立なる科學として建設する爲めに、先づ心理學を實例として類推的に右に述べしが如く論じて居るのであるが、それによりて見れば、殊に私が圈點を附せる言葉に注目して考ふれば、彼が社會化の一切の形式を對象とする社會科學と見る社會學なるものは、一の一般的社會科學にして、社會化の諸内容を夫れ夫れ對象とする他の社會科學が、特殊的社會科學と稱せられると同じ意味にて一の特殊的社會科學でないことは明白であると思ふ。ジムメルは上の圈點を附せる言葉によりて察知される如く、形式と形成されたるもの、即ち形式によりて實現されて居る諸關心及び諸内容との關係を、法則、定型、一般的なるものと特異的或は單稱的なものとの關係と同一視して居る。つまり彼の云ふ社會化の形式なるものは其の内容に對して、一般的なるものが特殊的なるものに對すると同じ關係を有するものである。かくて社會化の一切の形式を對象として之を研究する唯一の社會科學即ち社會學は、社會的歴史的現實態の科學的研究

究に於て、社會化の諸内容を夫れ夫れ分擔して研究する多様な或は雜多な社會科學に對して、唯一の一般的なるもの即ち唯一の一般的科學が、多様な特殊なるもの即ち多様な特殊の科學に對する關係に立つものと認められねばならぬ。尙ほジムメルは特に社會的なるもの即ち社會化の諸形式は何れの社會的關心及び内容にも局限されて居るものでなく、あらゆる一切の社會的關心及び内容に通じて行はれて居るものにして、かくて之を對象とする社會學はあらゆる特殊の社會科學(物件的又は歴史的)を貫いて存立する一の新しき社會科學であると論じて居るが、それによりて見れば彼の社會はヤハリ一の一般的社會科學であることは明白であると思ふ。是れ一般的なるものにして、始めて一切の特殊なるものを一貫し得るのであるからである。否な吾々は總て特殊なるものを一貫するものを、一般的なるものと稱し得るのであるからである。そうして社會化の形式は一切の社會化の特殊の諸内容に對して一般的なるものにして、之を貫いて存立するものであるとすれば、かゝる形式を對象とする社會學は云ふまでもなく一般的社會科學にして、他の一切の特殊の社會科學を貫いて存立す可きものである。云ふまでもなく特殊なる各社會的内容は相互に親密なる關係を有する。是れ既にコントが立てた一切の社會現象の連帶性の概念、又ミルが立てた一切の社會現象の合致の概念によりて闡明されたる真理である。かくて何れの特殊なる社會的内容も他の總ての特殊なる社會的内容の上に影響し、又それから影響されて居

る。併し何れの特殊的なる社會的内容も、他の總ての特殊的なる社會的内容を貫いて存立するとは云はれない。總ての社會的内容を貫いて存立するものは只社會化の形式だけである。かくて特殊的なる社會的諸内容相互の關係は如何に親密であつても、それは社會化の形式と一切の社會的内容との關係とは異なつて居る。要するに前者は特殊的なるもの相互の關係であるが、後者は一般的なるものと特殊的なるものとの關係であるのである。

尙ほ後に述べる處によりて學ばれる如く、ジメメルは社會化の形式は社會的でない諸關心及び諸内容を社會的内容に形成する形成要素(*das gestaltende Moment*)であるを見るのであるが、何れの特殊的な社會的内容もかゝる形成作用をなし得るものでない。唯物史觀説は經濟的内容にかゝる形成作用をなす力を認めるものであるが、それはジメメルの大に排斥して居る見解である。かくてジメメルが社會化の形式に對して認める意義は、特殊的な社會的内容の何れに認める意義とも異なつて居るので、要するに吾人が一般的なるものが特殊的なるものに對して有すると認める意義を、彼は社會化の形式は社會的特殊諸内容に對して有すると認めるのである。

さてジメメルは先づ上に述べし如くに、心理學を例として類推的に、一の獨立なる科學としての社會學の可能性を論じたる後、更に社會化の形式と内容との區別を論じ、そうして其の形式を内容から抽象し得ることを論證し、更に抽象されたる形式を科學的に研究する方法を論じて、以

て社會學が一の獨立なる科學として存立し得ること及び其の必要を究明して居る。尙ほ終りに彼は社會學と歴史哲學との差異を論じて、若し世の學者が歴史哲學の存続を願望するに於ては、彼の形式社會學が歴史哲學に對して如何なる意義を有するかを指示して居る。併し私は此處では只、ジムメルが社會化の内容から抽象されたる形式を對象とする一の科學と見る彼の社會學なるものは、決して一の特殊的社會科學ではなくして、一の一般的社會科學であると云ふことを論證するに必要なだけ、彼の所説を批判的に考察するに止める。

今ジムメルの論する處によれば、最廣義の社會は幾多の個人が相互關係に入り込む何れの場合に於ても見出される。一緒に散歩する爲めのほんの一時的なる結合から、家族や中世紀の組合の内部的な緊密なる統一に至るまでに、吾人は極めて多様な度合及び種類の社會化を承認せねばならぬ。そうして社會化の成立する爲めに必要缺く可からざる特殊な諸原因及び諸目的は、或度に於て社會過程の體或は質料を成すものにして、此等の原因の結果又は此等の目的の遂求が、關係する人々の間に惹起する相互作用、社會化が、即ち其等の諸内容が自から裝ふ形式である。そうして此の形式を科學的抽象によりて諸内容から分離することに、一の特殊的社會科學 (eine spezielle Gesellschaftswissenschaft) の全存立が基いて居るのである。是れ此處に直ちに明示される如く、社會化の同じ形式、同じ種類が極めて種々多様な質料に於て現はれ、極めて種々様々なる

目的の爲めに行なはれ得るのであるが、今此の如くに實質的條件の極めて相異なる社會團體間
にありても、同一の社會化の形式が行はれて居ると云ふことは、つまり其等の諸規定の差異の奥
に、其等の諸團體の中に、特異なる諸力、正當に抽象し得られる一の範域、即ちあるがまゝの社
會化及び其の諸形式の範域の存立することを證明するからである。此等の諸形式は個人の接觸に
於て、其の接觸の理由から相對的に獨立して發達するものにして、そうして此等の諸形式の總體
は、吾人が抽象的に社會と稱する處のものを現實に構成するのである。

ジムメルが社會化の形式と稱するものは、右に述べし如く同一の形式が極めて種々様々なる質
料或は社會的内容に於て現はれ、又極めて種々様々なる目的の爲めに行はれ得るものにして、更
に後に述ぶる如く、同一の質料或は社會的内容が又種々なる形式をとり得ると云ふが如き性質の
ものであるとすれば、それは社會的歴史的現實態の一般的なるもの或は根本的なものと見做し
得られるものにして、私が社會現象の一般的或は根本的元素的なるものと云ふは、即ち右の意味
のものに外ならないのである。何れの社會現象もそれが社會現象である以上、必ずならねばなら
ぬ何れかの形式、それが即ち社會現象の一般的なるもの、詳しく云へば根本的元素的なるものと
云ふ意味での一般的なるものである。さればジムメルが解するが如き意味の社會化の形式を對象
とする社會學は、何れの他の社會科學とも異なる特別な社會科學ではあるが、併し特殊の社
會科學ではない。ジムメルが社會學を *eine specielle Gesellschaftswissenschaft* と見る意味は、そ
れは何れの社會科學とも異なる一の特別な社會科學であると云ふのであるならば、彼の見解は

正當である、併し他の社會科學と同様な一の特殊的社會科學であると云ふのであるならば、彼の見解は謬つて居ると思ふ。

ジムメルは右に述べし如くに社會化の形式と内容とを區別し、特に形式を對象とする社會科學として社會學の存立を論じたる後、形式と内容とが不可離的に結合して存立して居る現實なる社會的歴史的現象に於て、内容から形式を抽象すること、或は抽象によりて形式を内容から切り離すことが、如何にして可能であるかと云ふ問題を論述して居る。そうして彼は幾何學を例として其の可能性を論證せんとして居る。彼の論ずる處によれば、幾何學は只形式だけとしては決して存立することが出來ず、常に只質料と結合してのみ存立して居る處の物體に就て、其の質料の研究は之を全く他の科學に譲り、只單なる空間形式のみを研究する科學として存立して居ると同じく、社會學も現實には只形式と内容との不可離的結合に於てのみ存立して居る社會的歴史的現實態に就て、其の内容の研究は之を全く他の社會科學に譲り、只内容から抽象されたる形式のみを研究する、一の社會科學として存立し得るのである。

併し私の見る處によれば、ジムメルが幾何學を例として社會化の形式を内容から抽象して研究し得ることを論證せんとするは、甚だ粗雑な考へであると思はれる。是れ幾何學を始め一切の數學は、今日の數理哲學によれば、社會學を始め一切の經驗科學とは學問論的性質を根本的に異にして居るものにして、幾何學を例として社會學の學問論的構成を推究す可きものでないからである。ジムメルの考へるが如き、經驗的實在としての社會的歴史的現實態の形式は、決して幾何學

の空間形式が規定されると同じ方法によりて規定さる可きものでない。若し強いて之を企だてるに於ては、社會化の形式は其の特有の意義を失なふて仕舞ふ。と云ふのは幾何學の空間形式なるものは、只論理的意義を有するだけのものであるが、社會化の形式は如何に内容から切り離されても、尙ほ大なり小なり經驗的意義を保有す可きものにして、若し然らずは相互に他から區別されることは出来ないからである。更に吾人の此處に注意す可きは、社會化の形式の經驗的意義と形而上學的或は本體論的意義との區別である。經驗科學としての社會學にありては、其の取扱ふ形式は經驗的意義を有するだけに止まる可きものにして、形而上學的或は本體論的意義を有す可きものでない。されはブツサル派の人々が社會の本體論的意義を究明せんとする研究は、總て社會哲學に屬す可きものにして、科學としての社會學に屬するものではないのである。

要するに此の「社會學の問題」に於て、ジムメルが社會化の形式を内容より分離することの可能性、及び之を分離する方法に就て論述して居ることは、あまりに簡單且つ粗雑にして嚴密なる學問論的批判に堪へ得るものでない。隨ふて嚴密に云へば、彼は此の論文に於ては只形式社會學の概念を一般的に提唱して居るだけに止まり、まだ充分學問論的に之を確立して居るとは云ひ得られない。それが爲めには彼は更に社會化の形式の概念の意義を詳しく究明し、且つそれが如何にして内容から區別して考へ得られるかを、充分論理學的方法論的に究明しなければならぬ。然らば彼は其の後の著作に於て、如何程其の仕事を成就して居るか。是れ私が「社會學の問題」以後の彼の著作に就き特に考究せんとする問題である。